調査報告

デンマークの若者支援

──若者へのインタビューその２・エフタスコーレとHTX──

人間発達文化学類　谷　雅泰
人間発達文化学類　三浦浩喜
総合教育研究センター　青木真理

はじめに

本稿は前回の報告[1]に続き，デンマークの教育機関に在籍する生徒へのインタビューから，デンマークの若者支援の検討を行おうとするものである。その問題意識の詳述は避けたいが，ガイダンス制度が彼らの実際の進路選択や将来設計にどのように影響を与えているのかを明らかにすることが大きな目的であった。今回の報告は，筆者である３名が2009年９月にデンマークを訪問して調査した結果である。

対象機関として，エフタスコーレ（Efterskole）とHTXを選択した理由は次のようなことである。前回の調査では，職業訓練を行う後期中等教育機関であるTECと，後期中等教育への橋渡しとなる10年生学校を対象とした。そのなかで私たちは，TECの学生で話をした学生がすべて10年生教育を受けていること，またそのなかに，寄宿舎制の私立学校であるエフタスコーレを経験した学生がいることを知った。義務教育学校で困難に直面した一人の女子学生だったが，サッカーのエフタスコーレに入った時のことを有意義な体験として語ってくれた。エフタスコーレについては次節で概観するが，このケースはある意味でエフタスコーレへ入学するひとつの典型である。オプションであり，政策的には必ずしも歓迎されていない面があるにもかかわらず，このセクターが近年人気を集めている理由を知りたいと思ったこと，特にガイダンス制度との関係でエフタスコーレはどのように理解すべきなのか（ガイダンス制度が十全に機能した場合には整理すべき対象なのかどうか）がエフタスコーレを対象とした主な関心であった。

次にHTXについてであるが，これまでの私たちの研究は大学への進学を希望している生徒たちには充分に及んでいなかった。HTXは大学に進学する生徒を対象に科学教育を行っている機関であり，そこに在籍している学生たちがどのような進路観をもっているのかを探りたいと考えた。

まず最初に，このふたつの教育機関について概略を説明しておきたい。

１．エフタスコーレについて

(1) エフタスコーレとは

最初に，エフタスコーレという教育機関の概要について，エフタスコーレの協会が発行しているパンフレットから紹介しておきたい[2]。このパンフレットは当事者の立場から宣伝のために発行されているものであることを踏まえなければならないが，現在のエフタスコーレの状況についてポイントを押さえて紹介しており，本稿の最後に資料として抄訳を紹介するので必要があればご覧いただきたい。

エフタスコーレは，私立の教育機関であり，14歳から18歳まで，第８学年から第10学年の生徒を対象に，１年ないし２年間の寄宿舎制教育を提供する。62%の生徒は第10学年に所属しており，第９学年が30%，第８学年が８%であるから，フォルケスコーレ（Folkeskole･公立の国民学校）のオールタナティヴとしての第８・９学年，第９・10学年，第９学年

だけの学校も一定数存在するものの，フォルケスコーレ終了後の第10学年の１年間のエフタスコーレが主流であることが分かる。1990年代には第10学年を選択した生徒の37%がエフタスコーレを選択するようになっている。2000年の統計で学校数は235校，生徒数は約21,500人。学校数でこの25年間に倍増している。生徒数は平均85名（男子40名・女子45名）である。

歴史的に見れば，エフタスコーレはグルントヴィ（Grundtvig，1783-1872）により構想されたフォルケホイスコーレ（Folkehojskole）を，思春期の若者に広げようとしたもので，Koldにより1851年に創設された学校を嚆矢とする。1970年代までは，グルントヴィとKoldの教育思想の影響を受けたエフタスコーレが圧倒的だった。また宗教的な背景を持った学校も創立されていた。70年代後半から80年代にイデオロギー的な背景を持つエフタスコーレが創設された。その後，1980年代以降にエフタスコーレの学校数が増加していく原動力となったのは，ひとつは学習障害などの特別なグループを対象とする学校が増えたこと，もうひとつはスポーツや音楽，演劇，自然，環境など特別な教科を中心とする学校が増えたことである。パンフレットによれば，2000年には，①グルントヴィ・Kold派の学校が16%，②宗教関係が22%，③音楽，演劇，芸術，スポーツなどを中心とする学校が15%，④特別支援教育が14%，⑤その他が13%である。ただし，複数の性格を持つ学校も多い。

エフタスコーレは，大幅な権限を持つ学校理事会により運営される。デンマーク教育省の監督を受けることにより補助金が支給されるが，カリキュラムを含め教育内容に干渉されることはない。第10学年というオプションの学校が主流のエフタスコーレは，教育期間を短くしたい一部の政治家にはよく思われていないと，協会のパンフレットにも書かれている。しかし，それでも制度が維持されているというのは，やはりデンマークの民主主義の深さから来るものであろう。

生徒がエフタスコーレを選択する理由は様々であり，不登校や行動上の問題，学習困難などがある場合や，家族が問題を抱えている場合，またそれまでいたフォルケスコーレから脱出したい場合などもあるが，自己の発達のために積極的に選択した生徒が多数である。この場合，寄宿舎で教師や仲間と起居を共にするという点が魅力になっている。

今回，訪問したエフタスコーレは上記の分類でいえば③であり，近年のエフタスコーレの人気を支えてきたタイプの学校である。５つのカテゴリーの中では比較的裕福な家庭から来る生徒が多いとされる。では，その学校について具体的に見てみよう。

(2) Sjæsølund Efterskole について

私たちが訪問したのは，コペンハーゲン中央駅から電車とバスを乗り継いで１時間弱の郊外に位置するSjæsølund Efterskoleであった。上述したようにエフタスコーレは学校によってその内実が全く違うので，ここで必要な限りにおいてこの学校の紹介をしておきたい。以下は応対してくれた副校長のHenrik Bro氏の説明による[(3)]。

この学校は10年生１学年，100名定員で，現在は88名の生徒が在籍している。８ヘクタールの敷地は自然に囲まれ，緑の美しい庭と広いグラウンドを有していた。スタッフは12名の教員と２名の用務員，２名のキッチンのスタッフで，教員のうち校長を含む３名が敷地内に住み，生徒と起居をともにしている。９名は外から通っていて，Bro氏もコペンハーゲンから自家用車で通勤しているということであった。

校舎の前景

この学校は特に政治的・宗教的な背景は持っていない。もとは非行傾向のある生徒を受け入れていたということだが，航海と関係のある学校で，理事長はデンマーク海軍の出身者であり，２年前までは航海術のコースがあった。実際，敷地は湖沼地帯にあり，敷地内にもボートが置かれていたので私たちもその名残を感じることができた。しかし時代の流れのなかで周辺環境にあわせて学校が変わってきていて，そのコースを廃止して体育と野外活動のコース

を作ったばかりである。学校の変化に合わせて生徒数も増加しているようで，前項で概説した時代によるニーズの変化にうまく対応してきたといえよう。この時代のニーズを敏感に感じ取ってそれにあわせていくという姿勢がエフタスコーレを理解する上で大きなポイントであるように感じられた。

エフタスコーレの生徒は10年生学校と同様に，夏（学年末）に10年生のレヴェルを満たしたかどうかの修了試験を受けることができる。修了試験に向けた準備として学校で試験を行えることになっていて，95%のエフタスコーレがそれを行っているが，この学校でも同様である。義務教育の終了時点（9年生の学年末）に行われた修了試験での結果に満足できない場合，この10年生の修了試験の結果を使えるので，生徒の中に前の試験の結果を補いたいという動機は確かにあるようであった。ただし，9年生クラスと，オプションであるとはいえ10年生クラスの試験で確かめられる価値は異なる。10年生クラスを修了すれば，高校に行く準備ができているとみなされる。それは必ずしも成績に関することだけではない。10年生クラスを経験すると，ドロップアウトせずに高校を修了する確率が高くなる，ということであった。この点は，高校からのドロップアウトが問題となっているデンマークでは大きな利点であると思われる。

食堂で昼食

尋ねたところ，特別なニーズのある生徒も在籍しているそうである。それほど目立つものではないが，前の学校からそのような情報は来ないため，問題を発見するまで時間がかかることもある。家庭でアルコールや薬物の乱用を行っていた場合など，他の機関と連携して対処するが，基本的にエフタスコーレはそのような生徒に新しいチャンスを与えるという目的を持っている，ということだ。ただ，敷地内でのアルコールについては厳しく，違反した場合退学させるという規則で，実際にまだ学年が始まったばかりに私たちは訪問したのだが，すでに家に帰された生徒もいるようであった。しかし，煙草に関しては敷地内（戸外）に1ヶ所，喫煙所があり，家族の許可が書類で提出された生徒には喫煙を許しているということだ。禁煙にしたいのでできれば吸わないように指導していて，冬には寒い戸外まで行かなければならず，面倒臭くなって喫煙の習慣がなくなることを期待しているとのことであった。

氏がエフタスコーレの教員を「世界一いい仕事」と述べたのが印象的であった。生徒たちの生活にずっと寄り添い，悲しい時にもうれしい時にも一緒にいることができる。寛容さ，親密さが必要で，一人ひとりを最善の方法で援助する。

前項でも一部の政治家が反対していると述べたが，Bro氏も，国会では政党によりエフタスコーレについての評価は分かれているが，179の議席（一院制）のうち反対派が過半数を得るまでには至っていない，と語ってくれた。近年，他の領域は予算を減らされているが，エフタスコーレはそうではない。そのニーズがあるからで，この学校も今年の入学希望者は去年の20%増だったそうだ。人々の中に支持する考えがあるからで，氏は，誰もがエフタスコーレに合っていてみんな来るべきだとは思っていないが，確かに必要としている生徒もいるので，エフタスコーレがなくなることがあればそれは大損失だと語った。

2．HTXについて

TECについては，前回の報告で紹介した[4]ので繰り返さないが，主に職業訓練を行う教育機関で，コペンハーゲンに5ヶ所のキャンパスを有する。もとはそれぞれが独立した教育機関であった。そのうちの3ヶ所が同じキャンパス内にHTX，すなわちTechnical Upper Secondary Educationを併設している。

デンマークの後期中等教育機関は，高等教育に接続する普通教育を行う機関と，職業教育を行う機関に分けられるが，前者には4種類ある。そのうち，伝統的な教育機関であるSTX（ギムナジウム）と，いま紹介したHTX（科学技術高校），ほかにHHX（商業高校）の3種が3年制の教育機関であり，それに加えて2年

制のHFという機関がある。後者はエフタスコーレを含む10年生学校をおえて進学する[3]。

大まかにいえば文科系のSTXに対して，理科系の大学に進学したい生徒はHTXに進学すると考えてよさそうである。今回は，TECのキャンパスのうち，FrederiksbergにあるHTXを訪問し，５名の生徒にインタビューしたが，インタビューした生徒は全員，大学への進学希望を持っていた。キャンパスが同じとはいえ，TECの職業教育のコースとは関係がないことが学生たちのインタビューからもわかる。あちらは違うコースで，自分たちは科学技術系に長けていて，それを生かして大学に進学するのだ，というエリート意識をはっきりと持っている学生たちであった。

私たちが訪問したのは土曜日で，同校のオープンキャンパスの日に当たっていた。施設を見て回り，廃棄物から燃料を作り出す実験や製作物の説明を学生から受けたり，また進学希望者や保護者らが参観している授業の様子を覗いたりした後，生化学のコースの３年生５名にインタビューを行った。

３．若者へのインタビュー

(1)　エフタスコーレの生徒へのインタビュー

場所：Sjælsølund Efterskole
日時：2009年９月25日午前
対象：Klara Nedergaard
　　ハンドボールコース，コペンハーゲン出身
　　Josephine Amalie Danneskjold-samsøe
　　サッカーコース，コペンハーゲン市のRødovre出身
　　Georgia B.Brask
　　アウトドア活動コース，ロスキレ出身
　　Henrik Bro 副校長
インタビュアー：青木，谷，三浦
通訳：鈴木優美氏

青木：みなさんの名前と出身地，専門のコースについて述べてください。
谷：加えて，ここに来た理由と，進路，ここに来るためのアドバイスは誰に受けたか，学校のカウンセラーにどのような指導を受け，それは有効だったかもお願いします。
Klara：10年生のクラスで学びたいと思ったのですが，学校に併設されている10年生クラスは退屈なので，専門の科目が学べて新しい環境の中で新しい友達も作れるこのエフタスコーレを選びました。来年普通高校に進学することを考えていて，そのために得意でない数学と物理の知識を補いたいと思います。高校を卒業した後は，夢のような話ですが，１年くらい世界を回って，大学に行って心理学を学びたいと思います。心理学は女の子に人気があるのですがとてもレベルが高いので，勉強はたいへんですが，がんばりたいと思います。
青木：心理学を勉強した後はどのような仕事に就きたいですか。
Klara：民間のクリニックを持つような心理学者になって，お金を稼ぎたいです。
青木：国民学校にはカウンセラーはいましたか？
Klara：あまりアドバイスカウンセラーは使っていません。学校にカウンセラーはいましたが，私は親と話し合って，このエフタスコーレに決めました。
谷：高校には行けたのに行かなかったということですか。

Klara Nedergaardさん

Klara：高校に入ることもできましたが，自分自身の準備が整っていない，つまり先ほどのような科目が足りないのと，自分自身が100％みんなと勉強ができるという状態でなかったのでエフタスコーレに来ました。
谷：ハンドボールのコースでしたよね。
Klara：そうです。ハンドボールです。エフタスコーレはとても人気があり，あちこち探し別の体育系のエフタスコーレを希望していましたが，レベルが高いのでこちらを選びました。こちらに滑り止めで来ましたが，今は以前ほどハードにハンドボールをしたいと思わないので，ちょうどいい具合に自分に合った程度にハンドボールができるので気に入っています。

Josephine：私はフットボールの専攻です。エフタスコーレに来たのは，高校に行くには自分が若すぎると思ったからです。また成績を改善したかったのと，自分自身に責任感を築きたかった，そして，新しい友だちに会えることを期待して来ました。ここを出た後には普通高校（ギムナジウム）に入って，英語と社会科を選択するつもりです。高校を終わった後はまだはっきりとは決めていないのですが，Klaraのように１年間世界を旅したいと思っています。その後は，自分のレストランを持ったり，保育士になるのもいいかなあと思っていますが，まだはっきりとは決めていません。
谷：カウンセラーにはどのように指導されましたか。
Josephine：自分もガイダンスをあまり使っていませんが，テストがあってそのテストで変な職種を提案されました。その職種というのが船の上で料理をしたりして乗組員のお世話をするというものでした。そんなのやりたくないよ，と断りました。テストもあまり役に立ちませんでした。これからここでHenrik（副校長）先生らに相談しながら，将来のことを決めていきたいと思います。「橋渡しプロジェクト」というのがあって，社会のなかで実践しながら，１週間高校に行って，１週間レストランで食事を作って仕事をするという経験をしたいと思います。

Josephine Amalie Danneskjold-samsoeeさん

青木：去年10年生クラスで，「橋渡しプロジェクト」の話を聞きました。
Josephine：自分の好きな希望を描くことができ，副校長先生が「こんなのはどうだ」と助けてくれます。
Georgia：ロスキレ（Roskilde）から来たGeorgiaです。エフタスコーレに来たのは，他の人と同じように，自分の準備ができていなかったからです。この中で勇気を身につけたし，自分のことを気にかけるということもできるようになりました。私は５年生のときにロンドンから来ました。急に決まり，不安なのでインターネットでいろいろと学校のことを調べているうちにエフタスコーレを見つけました。別のエフタスコーレも見に行ったのですが，そこはまったく自分には合っていなくてだめだと思いました。そのころはバレーボールをやっていたので，ここに巡り会ったのは「不運」だと思ったのです。主専攻をどうしようか迷っていたのですが，とりあえず野外活動のコースを選んで楽しみたいと思いました。実際にエフタスコーレに来て，１ヶ月ぐらいですが，とてもすばらしい経験ができて，みんなこのような体験をすべきだと思います。９年生からギムナジウムに行く過程の中でこのような10年生の経験を持つことはとても，とても重要なことだと思います。私はロンドンに11年住んでいたのですが，あのままロンドンにいれば，自分は12歳か13歳のときに寄宿制の学校に送られることになったのでしょうが，ここはそういったものとはまったく違いますし，今の私にはなれなかったと思いますし，私の人生で貴重なものです。
谷：ロンドンとデンマークとで，どう違うと思いますか。
Georgia：11歳になる直前までロンドンにいて，今から４年半前にデンマークに来ました。父がデンマーク人で母がスコットランド人で，家ではいつもデンマーク語で話をしていました。２月の半ばぐらいにデンマークに移ってきて，学校制度が全然違うので，驚きました。ロンドンとデンマークは比べようもないくらい異なる世界です。イギリスではプライベートスクールに行っていたのですが，夜は５時30分ぐらいまであるし，こちらはそんなこともなくとてもリラックスしていて自由な雰囲気です。ゆっくりと自分のテンポで受け止められるようになりました。その中で自己決定ができるというのがデンマークの学校の特徴だと思います。

Georgia B.Braskさん

青木：進路はどうですか。
Georgia：１年間，サバトー[5]を取って，旅をするつもりです。その後で高校に行くつもりですが，高校での専攻は今ははっきり決められなくて悩んでいます。「架橋プロジェクト」では,「メディアプロダクション」と,「体とスタイル」の二つを選ぼうと思っています。選択肢が多くてとても決めるのが難しいのですが，だからこそ自分のテンポでゆっくり考えることができるエフタスコーレに来たといえます。
谷：自分がエフタスコーレに来て一番よかったと思うことを一つだけ述べてください。
Josephine：：共同生活だと思います。
Klara：私もそうだと思います。
Georgia：共同生活の中で社交的なものも築かれ，驚くぐらいあっという間に親しくなります。

（その後，生徒へのインタビューで感じた疑問を質問するために，Henrik副校長にインタビューした。）

青木：エフタスコーレと10年生学校は同じ法律で規定されているのでしょうか。
Henrik：イエスでありノーです。イエスというのは，10年生の終わりの夏に試験があり，10年生と同じ基準を満たさなければならないという点で，同じ原則が適応されていると言えます。ノーというのは自由度が高くて，フリースクール[6]の法律が適用されているので，自己決定の裁量が高いということができます。95％ぐらいのエフタスコーレで試験の準備教育を実施していて，５％のエフタスコーレでは実施していません。
青木：「橋渡しプロジェクト」というのは，去年アルバーツルンド（Albertslund）の10年生クラスでも聞いてきましたが，エフタスコーレも10年生クラスも同じことを行っていると考えていいのでしょうか。
Henrik：この学校は政治的・宗教的な特別な理念を持っていませんが，キーワードは寛容性やお互いの敬意を育てるということで，生徒たちが社会において積極的な市民になることを目的としています。たくさんのキリスト教系のエフタスコーレがあり，最近はムスリム系のエフタスコーレなどもできてきています。その意味では多様なエフタスコーレがあります。デンマークの学校制度ですが，国民学校以前に長い伝統，フリースクールをつくる伝統があります。一定の数の人たちが集まって「世界一いい学校をつくろう」となったときに学校を確保することができます。大きく言って，約50％が普通の国民学校に行って，50％が自由な基礎学校に行きます。それは，フリースクールだったり，宗教的な理由でカトリック系だったり，特殊な教授法のフレネだったり，シュタイナーだったりします。自由な精神で成り立っていますので，自由に学校を設立することができますが，一定の国のコントロールもあるので，一定の基準を満たさなければなりません。その基準さえ満たせば，私立であろうが公立学校であろうが構いません。どちらが優れているとはいいませんが，いずれにせよ，つくるという可能性が与えられているということが民主主義的なことだと思います。

Henrik Bro副校長

谷：50％というのは学校の数ですか。
Henrik：生徒数ではなく学校の数です。
谷：６年生まで国民学校に行き，７年生から私立に行くことも多いと聞いていたのですが。
Henrik：そういうこともありますね。公立から私立に移ることもあれば，私立から公立に移ることもあります。私自身の子どもも私立で学ばせています。それは私の信念です。
谷：どういう信念なのですか。
Henrik：子どもはカトリックの学校に行っています。必ずしもカトリックを信じる必要はないけれども，自分を映し出す鏡があることは必要だと思うのです。私はカトリックでないし，カトリックである必要はないと思っています。しかしクリスチャンとして寛容性や隣人に対する思いやりを学ぶわけで，そのベースとなる価値観を獲得してくれたと思っています。中学校段階ではブルジョア系の学校に移り，そこでは教科教育に力をいれていたので，人間的な価値を築いた後は勉強に力を入れようという選択をしました。
谷：あなたはここに住んでいるのですか。
Henrik：違います。毎日車で通っています。３人の先生がいっしょに寝泊まりしています。６人の先生は通っています。

青木：９年間この学校に勤めているということですが，その前はどこにつとめていたのですか。

Henrik：いろいろな私立学校で教えていました。特に多かったのは，社会的に問題を抱えた子どもやアジア系の排除された子どもを専門としたところです。特殊教育や寮でも教えていました。元々は農業系の植物の植生などを専門としていました。オーストラリアで米を作ったこともあります。

青木：この学校には特別な教育ニーズを持つ子も入ってきますか。

Henrik：いるにはいますが，はっきり目に見えるものではありません。というのも，エフタスコーレの環境はそういった子どもたちにチャンスを与える，という意味で，小・中学校からそれに関する情報をもらえるわけではないのです。ここで生活しながら，少しずつ明らかになっていくという感じです。問題を発見するまでに時間がかかり，本人も自覚していないので，見つかったときには症状が深刻でたいへん苦労することがあります。私たちに何ができるのか考えて他の機関と協力して，トライしています。しかしアルコールや薬物中毒の子どもたちに対応することはできないので，できることとできないことを明確にして，他機関と協力します。この学校ではアルコールも薬物も禁止しています。けれども，この学校には１ヶ所だけたばこを吸える場所があります。

谷：日本では考えられないことです。日本では最近，学校が喫煙室をつくって大問題になったことがあります。

Henrik：必要の生んだ結果です。この学校は基本的に禁煙にしたいので，生徒たちにも禁煙を働きかけています。他のエフタスコーレでは，完全禁煙でたばこを吸ったら即退学というところもあります。この学校では，あの離れた場所（庭の隅）だけ許されているということは逆にたばこを吸うためにはあそこまで行かなければならないということで，こんな面倒なことをしたくないという気持ちを抱かせることが目的です。大通りでたばこを吸っても楽しくないし，喫煙を許していると言っても制限を設けています。今時の若者はそういうものですし，譲歩していると言えます。

谷：50年代に学校ができて，学校の性格が変化してきているといいましたが，それは先生の志向が変わったのか，時代の変化に適応したのでしょうか。

Henrik：時代の流れです。私たちは時代の流れに合わせて私たちの存在を主張し続けなければならないのです。２年前に航海術などをやめたというのも，やはり野外活動などの今日の若者たちの嗜好に合わせたということです。学校の教育方針を決めるのは経営陣ではなく，理事会です。

谷：理事会のメンバーはどのような構成ですか。

Henrik：総会で選出された者が理事になります。総会に来る人は，この学校の存在感を社会に示したいという人たちです。学校コミュニティというのでしょうか，50年前から熱心に活動している人たちが，経営陣を雇い，経営陣が教員を雇うという形をとっており，そういう形も悪くないと思っています。戦艦のキャプテンをしていた方が経営者です。

谷：高校に入るのに，物理や数学の成績が足りないという意味がわからないのですが。

Henrik：成績については12のポイントスケールというのがあるので，必要なら資料を差し上げます。デンマークでは９年間の義務教育があり，９年生が終わったときに試験に臨みます。その試験で，基準に応じて，成績が満足できるものでなかったり，足りなかったりするときにそれらを改善するために10年生クラスに行くことができます。高校を受けるときに10年生クラスの成績を記入することができます。10年生クラスに来る人は多いのですが，たいていは成績が改善されるからです。それは，９年生と10年生クラスとでは評価の観点が大きく変わるからです。10年生での評価の観点では，いかに成熟して独立して課題に取り組むことができるか，ということが評価の重点となります。９年生は勉強ができるかどうかが観点です。もちろん成績というのはすべてを表すのではありません。ここに入ってきた子どもたちは24時間一緒に過ごし，仲間のために料理を作ったりといったことを行います。10年生を経験した人は将来的に見ても，（高校をドロップアウトする人が多い中で）高校をドロップアウトすることなく卒業する確率が非常に高いのです。それは10年生クラスに参加することで，成熟するということがあるからです。

世界一いい教員の仕事はエフタスコーレの仕事です。それは子どもたちの生活に100％ついていくことができるからです。彼らが悲しいときにもうれしいときにも一緒にいることができる，それが大きなチャレンジでもありますが，大きなことを与えてくれると思います。そのために，エフタスコーレで働くには寛容性や共感できる力，親密さが必要です。子どもの一人ひとりが必要とするものを最善の方法で助けることができる能力です。

青木：エフタスコーレの教員免許は普通と変わりないわけですよね。

Henrik：普通の教員資格です。ただし，デンマークでは教員養成学校があり，ここを卒業すると普通の国民学校や私立学校で教えることができるようになりますがエフタスコーレでは必ずしもそういったものを適用していません。たとえば演劇を教えたりするときに教員資格はあまり意味がありません。むしろ役者として活躍してきたことが重要になります。それで，教員資格は重要ではありません。

青木：世界一の教員の仕事というのはなるほどと思いましたが，エフタスコーレがあるのでドロップアウトを防げるのではないかということもよくわかりました。ここ４，５年の教育改革の中で，政治家たちは10年生クラスは要らない，早く就職してもらいたい，サバトーも要らないという声があります。エフタスコーレも不要だという声もあるのでしょうか。

Henrik：そういう声は，増えることはありませんが減ってもいません。エフタスコーレはここのところ成功していて，去年と比べて入学希望者が20％もアップしています。政府がそういうことを言ったとしても，人々の間では別の意見が根強くあり，応援してくれるようになっています。私たちはエフタスコーレをいいものだと思っていますが，個人的には誰もが行くべきだとは思いません。誰にでも合っているわけではないからです。ただし，エフタスコーレがなくなることは大損失になると思います。私たちはロビー活動なども積極的に行っていて，政治的にも自分たちの利益を積極的に追求しています。

谷：最後の質問ですが，敷地面積や生徒数，教員数を教えていただけますか。

Henrik：敷地は８ヘクタールあります。生徒数は88人で，定員は100名です。先生は12人です。

青木：校長先生や教頭先生は入っていますか。

Henrik：12人の中に入っています。その他に２人の用務員と，２人の調理師がいて，全員で16人です。キッチンについて知っていますか？１週間子どもたちが朝から晩まで食事を作る当番があります。年に２，３回まわってきます。６人グループです。

青木：エフタスコーレというものがよくわかり，とても有意義なひとときとなりました。これが本当に最後になりますが，PISAの結果がよくないといわれていますが，どうお考えですか。

Henrik：他にできることがありますから。そのうちできるようになるでしょう。PISAの有効性について実際に疑問も提起されていますし。

お越しいただきまして，本当にありがとうございました。

⑵　HTXの生徒へのインタビュー

場所：TEC　Federiksberg校
日時：2009年９月26日午前
対象：Mathias Pape
Iman Baado Ibrahim
Dylan Marple
Sebastian Buss
Sutharat Ruhsasri
（全員，９月に最高学年の３年生になったばかり。インタビューは英語で行った。）

青木：この高校について教えてください。

Mathias：高校には３種類ありますが，そのひとつがHTXで，理科や数学の成績がよく，高等教育に入れるレベルの生徒が多く，高度な理論を学んでいます。私たちはHTXの生徒です。数学の評価がAの３年生のクラスに属しており，年齢は18歳です。

青木：先生との関係はどうですか？

Mathias：ほかの学校に比べて大変ざっくばらんで，友達のようにいろんな話ができます。

青木：それでは，どうしてこの学校を選んだのか，卒業後はどうしたいか，みなさんそれぞれ教えてください。

Mathias：国民学校の時に，数学と理科，特に化学に興味があり，文科系の科目はあまり好きではなかったので，この学校を選びました。将来はデンマーク工科大学に進んで，化学の技術者になるか，環境化学を専門にしたいです。

青木：この学校を終えたらすぐに大学に進学しますか？

Mathias：いえ，１年間のサバトーをとるつもりです。

Mathias Papeさん

世界を旅したいです。
青木：デンマークの伝統ですね？
Mathias：はい。トレッキングが好きなので，スイスの山を歩いてみたいです。今は毎日ハードな生活で，朝も早く起きているので，これからの勉強に飽きないためにも，卒業後にしばらくリラックスして過ごす時間が必要です。
Iman：私も文系より科学が好きだったからです。将来は医学や生物学を学び，できれば医者になりたい。

Iman Baado Ibrahimさん

Dylan：私も理科が好きだった。そしてこの学校を選んだのは父親の影響もあると思います。父はほかのテクニカルスクールで情報関係の科目を受け持っていますので。母はウェールズに住んでいますが，テキスタイルデザイン関係の仕事をしています。卒業後は，やはり１年間のサバトーをスイスで過ごし，大学に進んで化学，生化学などを学びたい。特に遺伝子の研究をしたいという希望を持っています。

Dylan Marpleさん

Sebastian：この学校はハイレベルな科学教育を行っているということで希望しました。卒業後は，１年間

Sebastian Bussさん

のサバトーの後，生物学関係の大学に行きたい。
Sutharat：やはり好きな科学についてレベルの高い教育をこの学校が行っているということと，私の家族は高い学歴を持っている人がいないので，私は大学まで行きたいという希望があったからです。卒業後は，１年間のサバトーの間に世界のいろいろな場所を回ってみたい。その後は，大学で薬学か医学を学びたいです。

Sutharat Ruhsasriさん

青木：デンマークでは国民学校卒業後に10年生学校に行く人が多いと聞いたのですが，あなた方はどうでしたか？
Sebastian：それは，次の学校に行く準備がまだできていない人たちです。
Mathias：そう，10年生学校は，国民学校と中等教育の橋渡しの役割をしています。10学年は９学年よりは少し高度な，高校に近い教育をしていますから，橋渡しになります。
青木：みなさんの中には10年生学校に行った人はいないのですね？
全員：いません。
青木：昨日私たちは，Sjælsølundエフタスコーレとい

うところに行ってきました。
Mathias：日本の若者はサバトーをとらないのですか？
青木：日本の高校生がサバトーなんかとったら大学には行けません。デンマークでは高校の成績で大学に進学するのですよね？日本の大学には入試があるので。
Mathias：でも忙しく勉強した後にはリラックスする時間が必要だと思う。
青木：日本の若者にとってはうらやましい話でしょう。大学に入っても，もう学校に行くのがイヤになる学生もいます。５月病という名前までついています。次の質問ですが，みなさん国民学校ではガイダンスカウンセラーの面談を受けましたよね？
全員：はい。
青木：カウンセリングは，みなさんの進学に関して役に立ちましたか？
Mathias：私の場合は体操をやっていて，スポーツが好きだったこともあり，スポーツ関係のエフタスコーレを勧められました。小さな子どもに体操を教えた経験もありました。体操をやっていて膝を怪我してしまったので，スポーツのほうに進まず，この学校を選びました。
青木：カウンセラーと話したことは役に立ちましたか？
Mathias：役に立ちました。女性の先生で，８，９学年の２年間にわたって話をしてきて，いろいろな学校のパンフレットなどもくれて，何がしたいの，どういうことなの，とたくさんの質問をしてくれたことがとてもよかったです。100問くらいの質問紙に答え，私は科学者がいいという結果が出ました。
青木：Imanさんはカウンセラーと話したことはどうでしたか？
Iman：役には立ちました。けれどそれよりも役に立ったのは，学校体験です。ここの他のHTXにもいきました。
谷：いくつくらいのHTXに行ってみましたか？
Iman：３校です。ここが一番大きい学校で，先生たちもいいし，教育レベルも高いのです。
青木：Dylanさんはどうですか？
Dylan：私もカウンセラーと話ができたのはよかったです。その学校がどんなところかとか，家でどれくらい勉強しているのかとか，いろいろ話せたので，何も知らない９年生にとっては自分の進路を見出すためにいいことだと思う。自分がこの学校に来たのは，今日と同じオープンキャンパスの日ですが，来る前から，この学校はハイレベルだということなどを知っていました。
青木：Sebastianさんはどうですか？
Sebastian：自分の場合は，親やインターネットからの情報が役に立ったので，カウンセラーの情報というのはほとんど役には立ちませんでした。
青木：なるほど。Sutharatさんはどうですか？
Sutharat：私は４年生の頃から上の学校に行きたいと決めていたのですが，７年生くらいからちょっとナーバスになってきて，ほんとうに上に進むのが正しいのかどうかと悩んだときにカウンセラーと話せたことはよかったです。
Mathias：私はSutharatと国民学校は別なのですが，同じバイオ関係のところで職場体験をしました。私の父の仕事がバイオ関係なのでそのつてでその職場を紹介されました。そこでこの分野で働くというのはどういうことなのかをしっかり把握することができてよかったと思います。
青木：では，HTXに入学する前からSutharatさんとは知り合いでしたか？
Mathias：いえ，職場体験の期間が違っていましたから，そうではありません。
谷：このHTXと，TECとのあいだに，授業を一緒に受けるといった教育上の関わりはありますか？
Mathias：ありません。TECは，技術的なものを学んでいます。電気技師になりたい場合などの学校で，理論的なレベルは高くありません。卒業後は進学せずに働き始めます。学校のdiplomaの性質が違っていて，テクニカルスクールのdiplomaはその職業に就ける，ということで，HTXの場合は職業には就けず，進学できるという資格になります。
青木：私たちはデンマークの教育制度，そのなかでも特にキャリアガイダンスのシステムに関心を持っていて，それでカウンセラーのことを尋ねたのですが，私たちが最初にデンマークに来た４，５年前に，教育改革が行われたということを聞きました。あなた方はその教育改革や政府がやろうとしていることについて，どんな意見を持っていますか？
Iman：ノーマリゼーションが行われていること，理論に偏らず，実践が重視されていることはいいと思います。
Mathias：今までは，文科系か理科系かを早い時期に決めていたが，これからはどちらも学ぶようになります。私たちは15歳の段階でどの高校に進むか決めましたが，私の場合は科学が好きではっきりと決まってい

たからいいものの，なかなか決められない友達もいました。高校，大学といろいろな勉強をして，23，24歳くらいで自分の進みたい道を決定するシステムのほうがよいという人もいると思います。

青木：ほかの方はどうですか？

Dylan：大学に入るためには試験を受けなければならないという教育省の決定には反対です。

Sutharat：大学に入るための試験というのは，個人面談で，ポートフォリオなどを使って自分がどんな勉強をしてきたかということを自己評価し，自己表現するというものです。

Sebastian：相手の教授が自分のやってきたことを理解してくれるかどうか，わからないと思う。

Mathias：私は，科学者というのはノートをとるということよりもそういう場で自分を開いて伝えていくということも必要だなと思います。

谷：みなさんは数学がAの人たちのクラスということですが，この評価はどのように行われるのですか。

Mathias：進路ごとに，いくつかの科目に関して必要な成績のレベルが定められています。たとえば私たち，生化学のクラスなら大学に進学するためには，数学と英語はA，生物学はB以上とか。１年の時にCだったら次の年はがんばってAをとろうと努力します。また，進路ごとにAをとらなければならない科目が定められているので，全部の科目でAをとる必要はありません。

青木：生化学のコースには何人くらいの学生がいますか？

Mathias：ふたつのクラスがあります。20数人ずつ。

青木：クラス分けは成績で？

Mathias：いいえ違います。学力で選別するということはしません。デンマークの社会は，優秀な人だけを引き上げるのではなく，すべての人にチャンスを与えようとする社会です。もしある人がある進路に進みたいと考えたら，そのモチベーションを高めていけるようにサポートしようとします。

青木：みなさんのように「ホット」な若者と意見交換ができたことにとても感謝します。今回デンマークに来て，いろいろな若い人たちと意見交換してきました。今日お会いしたみなさんはよくものを考え，これから何をやろうかということを決めて，情熱的に積極的にそのために行動しようとしていることに，感銘を受けました。みなさんとお話しできたことは私たちにとってとてもよい経験でした。日本の若者たちは自己表現が苦手な人が多いのですが，みなさんのように自分の意見を述べられるように，われわれ大学教員も努力しなければと思います。

Iman：デンマークでは，先生が話している授業よりも，生徒がプレゼンテーションする授業が多いので，表現ができるようになるのだと思います。

青木：ありがとうございました。

4．おわりに
――ゆっくりとした育ちを支援する――

本研究の初発の目的意識であるガイダンス制度との関係で生徒たちのインタビューを読むと，次のようなことがいえよう。すでに報告したように，2004年の法改正で新しいガイダンス制度が導入された[7]。前回までの報告で紹介した若者たちは，改正以前のガイダンス制度のもとで国民学校に在籍していたのだが，今回は国民学校を2009年夏に卒業した生徒たち（エフタスコーレ）と，2007年夏に卒業した生徒たち（HTX）であるから，新制度のもとでガイダンス制度を受けたはずの世代である。もちろん，このインタビューから結論的なことは言えないにしても，少なくともこのインタビューからは次のようなことをいうことができる。

エフタスコーレの生徒たちは，３人とも，ガイダンス制度の恩恵をあまり受けていないと感じているようである。テストで自分の気に入らない職種を提案されたということに不満を持っているらしいJosephineの例は典型的であろう。第10学年の学校であることからすれば，後期中等教育に進学した生徒に比べればより密なガイダンスを受けるべきと考えられるにも拘わらずである。

一方，HTXの生徒たちは，多くがカウンセラーと話ができたのは良かった，と話してくれた。しかし，実際の進路選択にガイダンスが決定的に影響を与えたとは見えない。エフタスコーレを勧められたがそちらには行かなかったというMathiasの例が典型である。この生徒たちは，早くから理系への進学を決めていて，その実現に向けたアドバイスをガイダンスで求めていたように思える。

それでは，デンマークのガイダンス制度改革が失敗であったかというと，そうとも言えないと考える。もちろん，今回のインタビュー対象者は進学希望者たちであるから，それ以外の層のことも考えないといけないということもあるが，それだけではない。デンマークのガイダンス制度改革をどう考えるかという私たちの課題と関わってくるのだが，それが単に「効率」を追求したものではなく，デンマークの教育の「風土」

とも呼べるようなものの上に成り立っているように感じるからである。

それは何かというと，「ゆっくりとした育ちを支援する」ということである。今までの調査でも感じてきたことだが，デンマークの教育者たちは，決して子どもたちの自己決定を急がせない。自分でゆっくりと納得した道を見つけることを支援しているように見える。

その典型がエフタスコーレであろう。前年の調査でTECの学生がサッカーのエフタスコーレから入学してきたことを聞いたということは冒頭に述べたが，その時違和感を感じたのは，「なぜサッカーなのか」ということである。教科の学習ではなくサッカーということだが，本人も特にスポーツに長けた学生のようにも見えない。

今回訪問したエフタスコーレも，サッカーやハンドボールのコースがある学校だが，日本のイメージと違って，それらをひたすら練習しているという様子は見えなかった。好きなのでそれができる学校に進学したということであって，その目的は「専門の科目が学べて新しい環境の中で新しい友達が作れること」や「高校に行くにはまだ自分自身の準備ができていない」，「高校に行くには若すぎる」，ということであり，彼らがこのエフタスコーレに来て一番よかったと思うことは「共同生活」なのである。これらは，紹介したパンフレットに述べられているエフタスコーレの魅力と見事に符合している。

そしてそのことは，Georgiaが語った，デンマークの「自由な雰囲気」，「ゆっくりと自分のテンポで受け止められること」，「その中で自己決定できるというのがデンマークの学校の特徴」という言葉に象徴されるような，デンマークの教育風土があらわれている。

では，HTXの生徒たちはどうか。全員，９年生をおえてすぐに進学している。その時に悩みがあったことも窺われる発言があったが，エリートとしての誇りを感じさせる発言も多かった。その彼らも，早くコースを進んでいくということに価値を見出していない。エフタスコーレの生徒も同じであるが，彼らが，移民の子弟である（したがって家庭的環境はデンマーク文化ではないと考えられる）２名も含めて全員，「サバトー」の夢を語ったことは印象的であった。実際に，１年後には彼らは１年間の猶予を与えられるのであろう。

私たちは，新しいガイダンス制度の目的が，効率的に無駄なくコースを歩ませるという側面を持つと考えてきた。政治家たちからみればそのような意図は確かにあったと考えられるが，一方で，このような「ゆっくりと自己決定することを見守る」というデンマークの風土は根強く，ガイダンスもそれを前提に行われているのではないかと考えるにいたった。しかしこのことについては，再度ガイダンスを行う側に確かめることを今後の課題としたい。

【注】

(1) 三浦浩喜・谷　雅泰・青木真理「デンマークの若者支援――若者へのインタビュー――」，『福島大学地域創造』第20巻第２号，2009年。

(2) “Meet the Danish Efterskole”（Efterskolernes Sekretariat 発行）

(3) 副校長から，最初に施設の説明を受け，学生のインタビュー後に補足的なインタビューを行った。学校について知っていただくためにこの学校についての基本的な事実をここで紹介するが，一部，のちのインタビューの記録と重複することをお断りしておく。

(4) HFが増えている背景には10年生を経験するものが増えて５割を超えるという状況があるのではないかとも思われるが，現地ではHFは社会人への再教育の場であるという説明にも出会った。詳細については今後の研究の課題としたい。なお，デンマーク教育省のweb上の情報によれば，STXとHFがあわせて146校，HTXが36校，HHXが60校あり，毎年46,000人の生徒が入学する。これは９年生または10年生終了後に教育を受けるデンマークの若者の60%にあたる。

(5) 適当な訳語がないので以下，「サバトー」と表記することにするが，sabbat år，英語でいえばsabbatical year，学校卒業後に１年間自由に過ごすこと。

(6) フリースクール（デンマーク語ではフリスコーレ Friskole）は私立の初等学校のことである。

(7) 青木真理・谷　雅泰・三浦浩喜「デンマークの進路指導について――ガイダンスセンターにおける聞き取り調査」『福島大学地域創造』第19巻第１号，2007年。

＜資料＞

“Meet the Danish Efterskole”（抄訳）
（Efterskolernes Sekretariat発行，英語表記）

エフタスコーレに関する事実

(省略)

○年間約21,500人の生徒がエフタスコーレに在籍している(2000年)。

○この間，学校数，生徒数は増加している。最近は特に，若年人口の減少に関連するすべての統計的な予測にも拘わらず。2000年の学校数は235校で，この25年間で倍増した。

○すべてのエフタスコーレは寄宿舎があり，全生徒が１年ないし２年間学校に居住して勉強する。

○ほとんどのエフタスコーレは，田舎か，地方の町の近くにある。

○エフタスコーレでは普通教育を提供する。エフタスコーレは，それぞれの若者の全面発達に関わることが第一の任務とみなされる。

○エフタスコーレの生徒はすべて14歳から18歳である。

○エフタスコーレでは第８から第10学年の教育を提供するので，自治体の学校（Folkeskore）の代わりにエフタスコーレで学校の最後を終えることができる。最終試験に合格する可能性も同じようにある。

○エフタスコーレは社会的機能を果たしているが，あくまで学校であり社会的機関ではないことを強調することは重要である。

○エフタスコーレの平均規模は約85名の生徒数である。

○エフタスコーレは私立の自己運営による教育機関であり，大きな責任と権限を持つ私立の学校理事会により運営される。学校はデンマーク教育省により監督される。

○学費と寮費が課されており，学校ごとに額は異なるが，現実にはその差は大きくはない。それらは一部が保護者により支払われ，一部は国と自治体が負担する。公的な財政支援により，全員がエフタスコーレに在籍することを現実にかつ自由に選択することが保障されている。

デンマークのエフタスコーレのユニークさ

このパンフレットはエフタスコーレについて紹介し説明するためのものだが，読者にはエフタスコーレは個人的経験であるべきで，客観的に学ぶものではないということを知ってもらいたい。235の学校にはいろいろなバリエーションがあり，とても違う形で，教育的，経済的，政治的，宗教的自由を行使している。

エフタスコーレはしばしば「寄宿舎学校」あるいは「継続学校」といわれるが，しかし，それではエフタスコーレの概念が誤解される可能性がある。だから，一貫してデンマーク語でエフタスコーレと述べることにする。

デンマークのフォルケホイスコーレの初期の年少者向けの形態としての起源

歴史的，文化的に，エフタスコーレはデンマークの自由教育運動に関係しており，エフタスコーレはしばしばデンマークのフォルケホイスコーレの年少者向けの形態とみなされる。

19世紀のデンマーク社会の変質と民主主義の発展（協同運動，政治的，教育的，宗教的，司法的な制度の変化）におけるデンマークのフォルケホイスコーレの重要な役割についてはよく言及される。フォルケホイスコーレは，最初に1844年にRoddingで創設されたが，国際教育にデンマークでもっとも最初に貢献したとみなされている。

N.F.S．グルントヴィ（1789－1872）――吟唱詩人，詩人，教育思想家，政治家であり，聖職者――はフォルケホイスコーレ運動の創始者であり，先見の明を持った天才だが，グルントヴィの先見的なアイデアを教育的実践にうつすのにもっとも力のあったのは，Kristen Koldであった。

グルントヴィはフォルケホイスコーレを成人向けのものにしようとしたが，Koldは思春期に入ろうとする若者に広げようとした。Koldの最初の学校は，1851年にRyslingeに創設されたが，若い農場労働者のためのものであり，この学校が最初のエフタスコーレとみなされている。

グルントヴィにとっては，学校は型にはまった職業的な訓練よりも，生活のための啓蒙をもたらすべきものだった。だから，学校はいかなる類の試験からも自由であるべきだった。教授法は，「自由で開かれた詩的で歴史的な語り」の基礎の上に置かれ，固定したシラバスはなく，人間の啓蒙が強調されていた。「生きた言葉」という方法によって，若者の中に受容的な態度を作り出し，生徒を生活の実践的な側面と具体的に関係づけることにより，学ぶ環境が強い文化的なインパクトをもたらすはずだった。

（当時の農業社会において）最初の対象集団は，若い農民たちだった。エフタスコーレやフォルケホイスコーレではそれらの若い人々は基礎的初等学校教育（７年間）を自由な教育で補うよう奨励され，それによってカウンターカルチャーを創造し，そのメンバーが1849年の最初の自由憲法で導入された民主主義という手段を実行する地位に就けようとした。それは言い

換えれば，農民を従属する集団から参加する市民という集団へと発展させようという発想だった。(省略)

義務教育――義務的でないスクーリング

1814年から，デンマークは学校出席を義務とするのではなく，義務教育であるとし，すべての親は公立学校と私立学校の間で選択する自由があるとされ，子どもを家で教育することさえできる――しかし，すべてが教育されなければならない。

今日では子どもには9年間の義務教育がある。すべての子どもの約87%がフォルケスコーレ（自治体立学校）に通うが，そこでは教育は無償で，全般的な枠組みは中央の法律により決められており，また教育省が個々の教科の教育についてガイドラインを定めている。

しかし，自由な学校選択が，国と自治体の制度の外の学校に公的に助成することにより保障されている。

事実，デンマークの親は（まれだがかつても），どの学校からも自立して，家庭で子どもを教育する権利を持っている。また，宗教的，政治的，教育的あるいはその他の理由で，子どもを私立の初等学校に通わせることもできるし，そのような親の数は増えつつある。すべてのデンマークの生徒の約13%が，自治体の学校の外で教育を受けている。私立の初等学校の中にはフリースクールがあり，これもまた教育哲学の基礎をグルントヴィとKoldに置いている。自治体の学校と違って，フリースクールと私立学校の親は学校を組織し，その職員を置き，監督する権利を持っている。フリースクールの明白な特徴は，親，教師，経営者の目標が全体的に一致していることにある。

国は，私立初等学校のすべての教育事業のための資金の75－80%を供給し，財政の残りの部分は親が学校に支払う。

エフタスコーレは，フリースクールと同じく国に支援された自由の上で発展している。

デンマークのすべての政党が，うまく機能している公立学校制度と国が支援する私立学校との間の共存――そして競争――という考え方を支持しているということは強調されるべきだ。この広い支援の意味は親と生徒の私立学校を選択する自由は富裕層のための独占的な特権ではなく，皆に開かれているということだ。

この自由に関する見解は，はるかかなたから突然現れたものではない。その背景には19世紀のデンマークの歴史があり，その時，さまざまな運動が中央政府に対し自信に満ちた拒絶を示した。それ以来，デンマークの政治においては，この意味の自由が存在すること，そして必ず守られなければならないことは疑問の余地のない原則なのである。

エフタスコーレ――歴史と統計

1851　最初のエフタスコーレがフュン島のRyslingeに創設される。

1874　デンマーク・ドイツ国境に沿って，ドイツ占領地のデンマーク人の生徒のスクーリングを促進するためにいくつかのエフタスコーレが創設される。生徒が国境を越えなくてよいように，エフタスコーレが寄宿制学校を始める。

1879　Galtrupエフタスコーレ創設。現存する最古のエフタスコーレ。

1930　エフタスコーレに関する最初の法律がデンマーク国会で可決される。主要な法改正は，1942，1954，1967，1970，1992，1994，1996，2000年。

1960-67　エフタスコーレへの生徒募集の問題から，エフタスコーレが若者のためのフォルケホイスコーレのような存在から（非公式の教育），固定したカリキュラムと試験のある国民学校（自治体立学校）の方向に変わるべきかどうかという議論に至る。

1967　エフタスコーレは公的な最終試験の一部に合格するように生徒に準備させることが認められる。この観点からすると，エフタスコーレはフォルケホイスコーレの伝統に――少なくとも非公式の教育という側面については――密接に関係することをやめた。他方で，エフタスコーレは依然として寄宿制教育に関係する特別な教育環境を提供しており，それはフォルケホイスコーレの伝統の重要な側面であって，その教育実践において「生活の啓蒙」という道からは絶対に逸れていなかったということだ。この点から，エフタスコーレは異なる教育の理想や要求のバランスを取ろうとしていると批判することが可能かもしれない。

1975　エフタスコーレはフォルケスコーレとまったく同じ最終試験を提供することが認められる。

1975-00　毎年いくつかの新しいエフタスコーレが創設され，この期間に総生徒数，学校数ともに2倍になる。

1994　自治体の支出が義務的となり，生徒（と親）の経済条件を改善し，平等にする――地方議会からは独立する。その後の数年間で，その結果は明らかである。より多い人々が今やエフタス

コーレを選択することができ，実際にそうしている。1994年法はまた，はっきりと中央レベル（教育省）から地方の学校理事会により多くの評価，決定，責任を委譲した。教育計画や新校長の任命などのような本質的な事項はこの点で完全に学校理事会の手中にある。

1996 重要な法律改正で，デンマーク国会は国の資金を受ける条件を厳しくし，はっきりさせた。エフタスコーレは自由で独立していなければならない（そのことを自己証明しなければならない）。学校は，法律的観点から，他の学校や運動と強い組織的・財政的関係を持ち，あるいは依存するような環境にあってはならない。決定，活動，取り決め，投資は，個々の学校と在籍する生徒のためにのみ行われうる。各エフタスコーレは真に自由で独立した，「その家そのものの主人」でなければならない。このことは，学校理事会により多くの責任をもたらすことになった。1996年の法改正の結果，大規模，かつ論争の的で，国際的によく知られたTvind School Cooperationは国の認可と資金を失った。

2000 最近のエフタスコーレ法で，各エフタスコーレはそれ自身の（固有の）基本的価値を定義し記述しなければならないという新しいルールが導入された。各学校年度の終わりに批判的な自己評価が行われなければならない。

さまざまな理想に基づく学校の広い多様性

それぞれのエフタスコーレ（とフリースクール）は，公的システムに対する小さな反抗を反映している。なにかもっとうまくいけるんじゃないか，と誰かが信じる。結果として，あなたは同じ心の他人と一緒に，あなたの子どものために自由でオールタナティヴな学校を選択する。それは，反抗を受け入れるというだけのことではない。それはデンマークにおける完全で自由な教育的思想と法律の法的側面であり，加えて，国の資金を得る可能性がある（親もまた学校の資金に貢献するにしても）。

現在ある235のエフタスコーレのほとんどは，よろこんで資金集めをし，時間とエネルギーを惜しまずに学校，学び，人生の価値についての彼らの特別な思考と理想にもとづいて学校を作ろうという献身的な人々による地方のグループにより作られてきた。その上に，その独創性のなかには，いろいろな考え方や運動と関係があるものがあった。

- 1970年までは，エフタスコーレの圧倒的多数はグルントヴィとKoldの教育思想の影響を受けていた。今日では，その構図ははるかに広く，多様に，複雑になっている。
- いろいろな宗教運動と提携した学校 ── 敬虔主義やYMCA／YWCAのような ── が特に1950年代，1970年代とまた最近，創立された。
- 70年代後半と80年代に労働運動や，政治的，イデオロギー的，あるいは教育的思想に基づくグループによりいくつかの学校が創立された。同時期に論争的なTvind Cooperationが少なくとも13のエフタスコーレを創立した。
- 80年代と90年代には特別なグループを対象とする学校が増えていき，現在では全エフタスコーレの約14%が特別な障害，あるいは一般的なLDのある生徒のグループに特に向けられている。これらの学校は普通の学校制度での挫折を経験してきた特別なグループ ── たとえば，失読症，発達遅滞，知的障害 ── にとって2度目のチャンスを意味する。これらの学校はしばしば，理論学習に加えて広い範囲の実践的教科を提供する。その分野の最新の科学に基づいた素晴らしく成功的な特別教育を実践して有名な学校もあるし，（14%の他に）マスターの学び，複合的な知性による思想に主に基礎づけられた特別な教育的方法により顕著な成功を収めている学校もある。
- 1980-2000年の間に，スポーツ，音楽，ドラマ，自然，環境などの特別な教科を主眼とする学校の数が増えた。このグループの学校への要求は現在大きい。おそらく，現代の個人の探究が創造的で自己達成的な方向での根本的に個人の発達に向かうことの結果として，以前のスクーリングでは十分にカバーできなかった要求であった。

現在の構図（2000年）は，次のように描くことができる。

- 広い一般教養を提供しているグルントヴィ・Kold派の学校（特別なテーマを主眼としていない）が全エフタスコーレの36%。
- いろいろな宗教に関係している学校が全学校数の22%。
- 音楽，劇，芸術，体育，運動などを主眼とする音楽／創造的学校が15%にのぼる。
- 学習困難の生徒のための特別教育を提供する学校が14%。

• 残りの13%は，自治体立学校（フォルケスコーレ）とはしばしばとても異なるカリキュラムによる混合グループの学校である。

1970年から2000年の間に，最後の３つのカテゴリーへ劇的にシフトしてきた。

時期が違えば違う種類の学校が増えて来るということが上記の記述の意図だが，多くの学校が単にひとつのカテゴリーに括れるものではないことを強調しておかなければならない。ふたつかそれ以上のカテゴリーに置いた方がよく理解できる学校がある。それでも個々の学校が運営されているある理想，いわばプラットフォームはあるのだが，それでも「単線」ではないのだ。たとえば，宗教的な学校がスペシャルニーズのある生徒たちにとってとてもよいものであるかもしれない。グルントヴィ・Kold派のエフタスコーレが，普通教育と啓蒙に加えて，広い範囲の創造的科目を大きく打ち出しているかもしれない。スポーツのエフタスコーレが体育の科目を強調していても，それはグルントヴィの教育思想を実践するという意味で「正統派」であったりするのだ。

生徒のプロフィール

1970年まではエフタスコーレの生徒の三分の二は地方から来ていてそのほとんどは農家の出身であった。21世紀になると，エフタスコーレの生徒の社会的構成は現在のデンマーク社会を実際に反映するものとなった。だが，違いがある。音楽／創造的科目の学校では，家族の平均収入は高い。反対に，学習困難の生徒のためのエフタスコーレでは低収入のグループの割合がより高い。

（特別な教育的あるいは社会的理由があって）地方当局が部分的にあるいは全部，財政支援して在学している生徒の割合はかなり多様である。最近の調査では５%から12%であり，明らかな傾向はない。1999年にはわずか５%だった。

• エフタスコーレの生徒の８%は第８学年に所属しており，
• 30%が第９学年で，
• 62%が第10学年である。

この分布は，デンマークの社会と教育のシステムのいくつかの事実と関係している。

まず第一にほとんどの親は子どもが14歳（第８学年）の時には，親元を離れるのは早すぎると考えている。子どもがもう一年成長した時には，それは明らかに受け入れやすいことになり，第９学年は基礎的義務教育の最後の年でもあるので，エフタスコーレを選ぶ生徒が多い。多くの生徒にとっては，エフタスコーレで第９学年を過ごすことは，青年期教育を継続する前に，初等教育から挑戦して本当に離れるということになる。明らかに，第10学年はエフタスコーレのとりわけて人気のある段階である。このことと関わっては，デンマークの第10学年はオプションであるということを理解することが重要である。生徒（と親）がより明快に，資格をえるために選んだ学年なのである。

にもかかわらず，1990年代には生徒の６，7割が，青年期教育を継続する前に義務ではない第10学年を選択した。そのうちの37%がエフタスコーレを選んでいる。この傾向はデンマークの政治家の一部には好まれていないが，彼らは青年の教育コースをより短くしたほうがよいと考えているのである。21世紀になり，新しい法律が可決されたが，第10学年は義務でないままとされた。しかし現在は新しい教育の要求と傾向があらわれている。第10学年のあり方や頻度にこのことが実際に影響を与えるか否かを即断することはできない。

洗練された教育のコンセプト

建物と敷地はさまざまである。同じようなエフタスコーレはない。100年以上のものもあるし，それよりも古い城のなかにあるものもある。エフタスコーレのために0から建てられたものはほんの少しである。以前は公立学校や施設として利用されていたり，農場でさえあった建物にエフタスコーレが入ることが多い。「標準的なエフタスコーレ」などない。

エフタスコーレは完全なカリキュラムの自由を享受しているので，個々の学校の目標は学校の物理的な構造や配置にもその影響がある。正統派のグルントヴィ・Koldや敬虔主義の学校の多くは講堂を持っていて，そこで校長が一度に全生徒に講義をすることができる。体操やスポーツを強調している学校は，もちろんそれらの活動のためのよい施設を提供するし，演劇や音楽を強調する学校はリハーサルのための教室や，場合によっては実演のためのホールや建物さえあるかもしれない。非学術的な活動を強調するそれらの学校は，農場やワークショップに似ていることがある。

規模がさまざまである。エフタスコーレの平均は，生徒数85名――男子40名，女子45名である。第９学年，第10学年のみの学校が多い。生徒数が30名だけという学校もひとつあるが，60名から90名の学校が多く，150名以上の学校もわずかにある。

生徒は通常２，３名，時には４名が一部屋に寝起き

する。すべての学校が共学である。男女が隣り合う部屋に住んでいる学校もあるが，居住区域が厳格に分けられていて，異性の生徒の部屋や廊下を訪問することさえ禁じられている学校もある。

規則もまたさまざまである。各学校の理事会はその学校の規則をはっきりさせ決定している。校長とスタッフは，その規則を実行する義務がある。もし，時がたつにつれて教育的実践や現実が規則の変更を要求することになれば，多くの学校で理事会とスタッフの共同の場での議論が行われるだろう。通常，規則はかなり論理的でシンプルである。たとえば下記の例のようなものである。

いろいろな点で私たちの学校は「小さな社会」です。機能的な集団となるためにははっきりした規則が必要です。入学前に基本的な規則を承認しなければなりません。

1．共通で義務的なスケジュールかオプションかに拘わらず，予定のすべてのスケジュールに参加しなければなりません。
2．洗濯，部屋や共用部分の割り当てられたところの掃除など，毎日の家事に参加しなければなりません。同様に，食堂やアウトドアの当番（1学年に1週間）を担当しなければなりません。
3．あなたは仲間にあなた自身がしてほしいようにしてあげなければなりません。またあなた自身の持ち物を扱うように，共有物を扱わなければなりません。
4．人のものと自分のものの区別を知ることを期待します。
5．学校の敷地内や，学校外での学校のプログラムに参加していてその地域にいるとき，また学校と家庭の移動中においてさえ，アルコール飲料を飲んだり所持すること，ドラッグを使用することは認められません。この規則に反した時はただちに退学処分となります。
6．訪問の計画がされているとき以外には，男子の廊下には男子だけ，女子の廊下には女子だけしか入ることは許されません。この規則に反した時はただちに退学処分となることがあります。

アルコールとドラッグの禁止については，ほとんどの学校がかなり厳しい。ただし違反者をどのように処遇するかはかなり異なる。一般的にエフタスコーレの特徴は規則と一般的カウンセリングとの結合である。学校が14歳から18歳の年齢集団の寄宿舎教育を引き受けるとき，学校は親からの1年間育ててくれるという信用に対する責任が生じる。生徒が成長でき，責任感をもち，他人への行動上の要求を確立し，一般的に社会的慣習に敬意を払うような社会的環境を作り出すうえで，この過程では幅広く，広い心をもったしつけの方法が必要な道具なのだ。

最近の調査では，エフタスコーレの生徒の多数は，自分の成長発達のために積極的にこの教育機会を選択した，実にうまくいっている若者たちであることを示している。しかしエフタスコーレには，特別なニーズがあったり，家族の問題を抱えていたり，不登校や行動上の問題，学習困難などのある生徒たちが多く在学している。エフタスコーレは彼らの成長の機会である。その強みは，いろいろな生徒がいる集団の可能性と，生徒と教師がとても個人的で親しいレベルで関わるというユニークな教育環境である。生徒集団の各年のバランスをどうするかということは，もちろん常に校長とスタッフにより選択される。

献身と専門的な仕事との微妙なバランス　エフタスコーレには教師の個人的な関与が必要であり，エフタスコーレの教師の専門性は疑いなくとても厳しくかつ価値あるものである。生活スタイルとまでは言わずとも少なくともユニークな専門職であり，昼間の学校の教師のそれとはかなり違う。

エフタスコーレ法によれば，住み込みのスタッフが少なくとも2人いなければならないが，ほとんどの学校にはそれ以上いる。校長他すべてのスタッフが敷地内に居住している学校さえある。その思想は，親しくかつ分割されない学校での日常生活を作り出すということである。その点で，ソーシャルワーカーが授業の後を引き継ぐというのではないことが強調されなければならない。伝統的な教科を教え，夕方には創造的なワークショップを開き，必要な時には生徒を叱り，生徒間のいざこざを解決し，サッカーの試合を計画し，生徒と一緒に食事をし，生徒を「おやすみ」といって抱きしめ，次の日の早くに「おはよう」と言って起こすのはすべて同じ教師なのである。もちろん教師にもほかの給料をもらう人々と同じように義務も勤務時間もあるのだが，それよりも，これらのすべてが意味しているように，彼らはエフタスコーレの教師として雇用されているのだ。

エフタスコーレの自由

国と学校との関係をつかさどる一般的な原則は「自己経営の原則」と「学校と生徒への惜しみのない支援」

である。

国の認可と財政支援を受けるには，エフタスコーレは以下の条件を満たさなければならない。

- 私立の，14歳から18歳までの若者に普通教育，協同，人生の啓蒙を提供する自己経営の寄宿制学校であること。
- 学校理事会は目的と教育プランをはっきりと示さなければならない。
- 学校はそれがもとづく価値を示し，また毎年自己評価をしなければならない。
- 学校施設（寄宿施設を含む）と教育設備が基準を満たさなければならない。
- 創設時の学校理事会は確実で現実的な予算により運営されなければならない。また一度認可された時には学校は存立可能で健全な財政を示さなければならない。
- 学校は自由で独立していなければならない。

学校がこれらの条件を満たせば，国の認可を受け財政支援を受ける資格を得ることになる。その上，生徒は親の収入による個人への国の補助金，収入や自治体で差のない自治体の補助金を受けることができる。(国と自治体）すべての公的支出で運営費の約85％が賄われており，親は平均15％を支払っている。生徒（と親）の実際の授業料は，ほとんどの人が支払える水準になっている。

ごく親しい関係にあるとかデンマークに居住しているということでないかぎり，外国の生徒には補助金の資格はないことは銘記する必要がある。

各学校の違いは，自己経営の権利が形だけの自由ではなく実態を持った自由だということの証となる――エフタスコーレは自由な学校なのである。以下はこの自由の重要な側面である。

カリキュラムとイデオロギーの自由　エフタスコーレは，エフタスコーレ法で特に概略が定められている幅広い教育条件，つまり寄宿制の教育的な生活の枠組み内で普通教育，協同と啓蒙を提供すること，の枠内にとどまっている限り，教科のあらまし，授業，教育方法を自ら決定することができる。学校が異なれば教育方法もかなり異なる。しかし，どれほど違いが大きくても，正しい教育方法や学校を経営する正しい方法を決定するのは国でもほかの公的機関でもない，ということは皆が同意している。国は，学校が政治的，宗教的，教育的方針に基づいてカリキュラムを決定することに干渉しようとはしない。

たとえば字義的，敬虔主義的に聖書を読むことを基本とするカリキュラムの学校もあれば，いろいろなワークショップや農場で働くことを教える教室のある学校もあり，また生徒と教師がその時期その時期に学ぶトピックを決めるのが学校だという考え方でカリキュラムに固定された教科は少ししかない学校もある。

しかし，ほとんどの学校は公立学校と同じ修了試験の準備教育を行っていること，このことはある程度，実際に行われるカリキュラムの自由に影響を与えていることは付言するべきだろう。

雇用の自由　エフタスコーレの校長の任命についてはとくに公的機関の承認を受ける必要はない。教員養成校での教師教育を受けたことその他，どのような正式の経歴も要求されない。その学校の性格と教育目標に従って最も資格があると信じてその人物を任命することは，自己経営のエフタスコーレの理事会に完全にゆだねられた責任なのである。

つづいて，校長はスタッフを任命するが，ここでも教師としての訓練は必要とされない。実際には教師の85％はそのような訓練を経験している。しかし，エフタスコーレの教師に特徴的なことは，二重の教育を受けていること，たとえば建築士であり教師である，ということである。芸術の鍛錬と教師教育が結びついていることもある。その学校の教育的・イデオロギー的目的と合っていない，あるいはその学校が十分な数の生徒をひきつけられないといった場合には，教師を解雇することも自由である。

生徒の自由　すでに説明したように，エフタスコーレは学校であり，教育的・社会的機関と結びついたものではない。広い自由と公的な経済支援とは関係がない。生徒（と親）は，希望するどのエフタスコーレにも入学を希望することができる。一方で，学校側は入学希望を拒むこともできる――たとえば，その学校が提供できる教育とは別の特別な教育をその生徒が必要としていると判断するような場合には。学期の間でも，生徒が退校を希望する場合にはそうできるし，規則違反や教育の妨害をした生徒は退学させられることもある。

責任の下での自由　上述したように，エフタスコーレは広くて独特な，自由と自己運営の下にある。学校理事会は非常に大きな権威と責任を有している。日常の学校経営は校長とそのスタッフが行うが，学校理事会は最高の議決機関である。教育省は監督する義務を負い，時々に学校を訪問してある事項について詳細な情報を求める。しかし，何をどのように教えるべきかについて公的に求められることはなく，国の監督は教授

内容や方法ではなく，公的な，経営的な，法的な，財政的な事項に関わるものである。

このことは，デンマークの伝統や考え方，文化になじみのない外国人には奇妙に感じられるかもしれない。どうしてデンマーク国家は支配や要求を行うことなく，それほど教育関係の助成を行うのかといぶかしむ向きもあるだろう。その答えは，デンマークの歴史の中にあり，個人と国家との関係についての深く根付いた特別な見方の中にある。その考え方とは，少数者の権利ということであり，多数派により却下された民主主義の上の少数者を守るということを子どもの教育に関係する事項についても貫こうということである。

同時に，長い経験からこの考え方と公的な投資に価値を置いているのである。それにより社会にもたらされるものは，なによりも明確な社会意識を持つ，積極的で独立した若い市民であり，彼らの公的な資質は標準に達しているのである。

またそれ以上に，社会は，同じく「困難なケース」を引き受けて教育することをいとわず，行える教育セクター，精神と自信を励ますことのできるセクター，若者に関する問題を解決することのできるセクターを，手に入れることができるのである。

人気の秘密

今日，エフタスコーレはデンマークで最も急速に発展している教育事業であり，初等教育機関と中等教育機関の溝を埋め，より重要なことは14歳から18歳の若者に寄宿学校で成長発達する機会を提供している。

この成功を理解する鍵は，デンマークの今日の若者に対して，寄宿制の教育的社会的環境が持っている魅力とインパクトである。エフタスコーレは家族にも公立学校にもデンマークの社会にも欠けているものを提供することができる。

生徒たちがエフタスコーレへの入学を選択した理由は以下のようなものである。

- 新しい環境に変わりたい，あるいは新しいスタートを切りたいという必要（デンマークの生徒は第１学年から第９学年まで教師も教室も変わらないことがよくある）
- 新しい友達と会いたいという願い
- 親との関係を改善したい
- 個人的発達，自信の改善への熱望
- ある政治的，宗教的，あるいは教育的指向性を持つ学校に行きたいという思い
- 基礎的科目の技能や知識を改善したいという必要
- エフタスコーレで提供している教科やカリキュラム外のレクリエーション活動に挑戦したいという願い，ある教科，たとえば音楽，演劇，体育などにもっと時間やエネルギーを割きたいという願い
- より成熟して将来の人生や教育的方向に関わってよりよい選択ができる資格を得たいという必要

これらの多くは積極的なものだが，もちろんなかにはよりネガティブな動機，たとえば家庭や現在の学校での問題などからエフタスコーレを選ぶ生徒もいる。

人生や個人の関係を割こうとする現在の社会的傾向を中和するような基礎的な原則や思想に基本を置いているので，この学校の環境の魅力は非常に本質的である。最後になったが大事なことは，若者たちが本気で受け止められ，プログラムと社会的関係に入っていくことを期待されているということである。

エフタスコーレの一番の強さは，「毎日の生活の価値」を提供しているということである。

（以下省略）

【謝辞：調査にあたって，インタビューに応じてくださった皆さんはもちろん，デンマークの多くの方々にお世話になった。お名前をあげることはしないが感謝申し上げたい。またエフタスコーレの生徒へのインタビューは，通訳をデンマーク在住の鈴木優美さんにお願いした。御礼を申し上げたい。】

〔本稿は，平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「若者のキャリアガイダンスシステムの構築に向けて――デンマーク・日本の比較研究」による成果の一部である。〕